

## 「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第29陣

### 参加者の感想（抜粋）

○8日間の訪日プログラムがもうすぐ終わろうとしている。毎日新たな発見があり、新たな体験があった。最も印象的だったのは2つの大学での交流だ。

最初の横浜国立大学での教育交流では、日本の教育界の発展と現状について、中国との違いを比較することができた。小学校から大学に至る教育モデルと教育課程、そして日本でも教師の減少という問題に直面していることを知った。しかし私は日本の学校教育のカリキュラムを非常に好ましく思う。全てが学生の自主性を育む学習をメインとしているからだ。これは中国の新教育課程改革における教育理念にかなり近い。私の考えでは、学生を学習の主体とするということは、その学習能力や問題解決力を伸ばしていかなければならないということにほかならない。

立命館大学での英語による交流は予想を超えてスムーズだった。日本の大学生の学習事情について知ることができただけでなく、私も自分の専攻に関するカリキュラムを紹介したことで、その違いなどを日本の大学生にも紹介できたのではないかと思っている。

帰国後は、自分の親しい友人や親族に日本の文化そして国民の現状について、実際の状況や自分自身の体験を基に話し、広めていきたい。そしてそれ以上に日本の教育の優れた点について友人たちにも学んでもらいたい。それらを自分たちの生活や学習に取り入れ、多くの利点を将来の自らの教師人生に活かしていければと思っている。

○訪日前、日本は極めて繊細で洗練された国であり、趣のある茶道や華道などを究める一方、生真面目で面白みに欠けるというイメージだった。

訪日後、日本は洗練された国というだけでなく、人々は楽しいユーモアも兼ね備えていること、そして細やかで情熱的な関西人と真面目でスマートな関東人がいるということも体感した。

体育教育を専攻する学生として、私は今回大学訪問を通じ日本の教育について多くを知ることができた。教育レベルが恐ろしく高いこの日本という国にあっても、向上心の薄い教師が一部には存在し、そうした問題に対処するため国も施策を講じるなど、中国と共通する点もあった。また研究という側面から見た時、日本の子どもたちは小さな頃から実践的な力を鍛えられており、非常に主体的で能動的なところなどは、中国が学ぶべき点だと感じた。自分自身が多様な能力を備えていてこそ、専門分野でもしっかりと地に足をつけていられる。たとえ自分が何を専攻していたとしても、世界と繋がろうという姿勢を忘れてはならない。

○ホームステイは、8日間の訪日期間中最も印象深く、最も多くのことを感じさせられたプログラムであった。地元の家庭に泊まったことで、元々縁もゆかりもない、全く見ず知らずの言葉すら通じない人と、たった一晩で親しい間柄になれるなど、29年生きてきた中で最も忘れられない経験だった。ホストファミリー宅では、親切で優しい人たちと本当の触れ合いができ、言葉の壁などお互いの交流には何の妨げにもならなかった。この夜、私は正真正銘の日本の家庭での文化や考え方を味わった。おばあちゃんは私た

ちにとっても丁寧に着物を着付けてくれ、まるで明日にでも嫁いでいく私に家族が花嫁衣裳を着せてくれているような感覚すら覚えたし、おじいちゃんと一緒に歌を歌ったり詩を吟じたり、テレビを見たり散歩したりして、すっかり自分の家に帰ったような気分だった。共に過ごした時の短さ、慌ただしい別れ。だが結んだご縁は永遠のものとなった。

8日間、日本の文化や歴史、政治経済など様々な事柄に肌身で触れ、この国の素晴らしさをまさに実感することができた。帰国後、最も皆に伝えたいことは、やはり日本人の国民レベルと意識の高さである。東京であれ、大阪であれ、奈良やその他の地域であれ、或いはどんな職業に就いている人であっても、その全てが活力とエネルギーにあふれ、極めて高い質とレベルを保っている。思うに、それこそがこの国に希望が満ちている最大の理由なのではないか。もちろんそれには、日本の教育のあり方、子どもを育む上での価値観、高校・大学の教育スタイルも欠かせない要因だろう。当然のことながらそこには美点もあれば欠点もある。中日両国は、学び合いの心、そしてそのための歩みをこれからも加速し、強めていかなければならないと思う。

○以前の日本に対するイメージといえば、日本人はルールをよく守り、何事もいいかげんにしない、などといった随分古くさい時代のままだった。だが今では、人情味と優しさにあふれ、とても親切なだけでなく何より礼節を重んじ、他人に迷惑を掛けないなど敬服すべき真面目な国民性の国なのだ、とその印象が変わった。

今回の訪日では横浜国立大学と立命館大学を訪ねる機会に恵まれた。まず横浜国立大学では日本の教育制度について十分な理解が得られたし、中国ととても似通っていると感じた。立命館大学では、スポーツ健康科学部の学生らと英語でコミュニケーションをとり交流したが、みんな英語がとてもうまく、会話もスムーズだった。この大学での交流で、日本の学生の考えていることや勉強の様子を知り、日本の教育について一層理解することができた。

○最も印象に残ったのは立命館大学の学生との交流だった。普段の一日の生活について話ただけでなく、お互いの趣味や将来の目標についても語り合った。その中で私は中国と日本の学生生活にはかなりの共通点があることに気付いた。共に自分の専攻で目指すものがあり、日々のカリキュラムもとてもよく似ている。しかし日本の大学のサークル活動は自分たちよりずっと充実しているし、大学側が設置する学生寮がない分、彼らの生活はより自由なものに思えた。言い換えれば一層の自制心が必要とされるのだが。また、中国と日本では学生の養成において、方法は共通でも日本には日本ならではの利点があった。先進国として、より豊富な資源が教育分野に投入されており、立命館大学のスポーツ健康科学部などは、まさにその先端技術投入の一例のように思われた。中国の場合、おそらくまだ「基礎固め」により比重が置かれ、国際標準化を一気に成し遂げるには無理があるだろう。しかし私たちは皆それぞれ将来に向けて明確な目標を抱き、そのために今まさに努力している。このことはきっと世界共通のはずだ。

中国に帰ったら、自分の身近な友達や家族、大学の友人らに日本の本当の姿についてアピールしたいと思う。古い世代の人たちは日本を敵視しがちだし、若い世代が知っている日本はその多くをアニメや漫画から得たものに過ぎないので、私は彼らに教えてあ

げたいのだ、日本には私たちが学ぶに値するものがたくさんあると。人への接し方や物の扱い方から、科学技術や教育制度、教育の重視に至るまで、日本には参考とすべき点が本当に多い。私が話すことで親しい友人や家族がこれまでの偏見を捨て、真に今の日本を理解してくれたらと願ってやまない。そしてもしまた機会に恵まれるなら、私は再びこの地に足を踏み入れたい。そしてもう一度この国の文化に触れたいと思っている。

○日本を訪れるまで日本についてほとんど何も知らず、来日してから少しずつわかってきたという感じだ。例えば、日本人はとても優しく親切で、礼儀正しく、マナーやルールをよく守り、環境を大切にし、研究や交流を好み、謙虚で勉強熱心である。

また、中日両国は元々こんなにも多くの類似点や文化的な重なりがあり、同じ目標を抱き、共に中日友好の発展のために力を尽くしたいと願っている。日本は電化製品や施設設備、教育などとても進んでいるし、経済も非常に発展している。これから更に多くの交流や学習の機会を得て、双方向での働きかけができたと思う。今回の訪問は時間的な限りはあったものの、得たものは多かった。せつかく与えられたこのチャンスを一層大切にしたいと私たちも思った。今度は日本の皆さんにも私たちの国、中国を訪れてもらいたい。歓迎のドアはいつも大きく開け放たれているのだから。

中日の友好の継続と更なる発展を願っている。国には双方の交流を広げ、今の若者たちが正しい考え方を持てるよう導いてほしい。そして目標を定め、初心を忘れることなく歩み続けたい。理想と情熱ある友好関係の実現を目指して。

○一番心に残っているのは、松山バレエ団と玉川大学訪問である。

命に宿る全ての力を踊りに捧げている最も真摯なプロ意識がそこにはあった。そしてそうした真心こそが人の心を打つのだ。新しい世代の若者である私たちは、実のところ国の歴史や世界の歴史について十分理解しているとは言い難い。しかし松山バレエ団の踊りを目にした時、私はそこに中日間の歴史が存在していること、そして当時彼らの間に芽生えた友情を感じ、私の心は激しく揺さぶられた。これほど人の心を打つものが他にあるだろうか。

更には玉川大学での伝統舞踊のパフォーマンスである。彼らもまた若い世代であるというのに、自分たちなりに伝統を理解し、解釈を加え、自分たちの踊りを踊っていた。彼らの中に、ある種の力、生命力が息づいているのが感じられた。伝統とは古くさいもの。しかし彼らはそこに最も人の心に響く舞踊を表現しようとしていたのである。今回、全てに感動させられたが、いったい何が自分たちの心をこんなにも打つのかを改めて考えてみなければならないだろう。思うに、それは人としての誠実さ、そして自らの専門に対する真摯な姿勢ではないだろうか。対して、今の中国の大学生にはそうしたある種品格のようなものが欠けている。中国の発展は余りにも速過ぎて、人として身に付けるべき多くの品性や一般的常識を軽んじてきてしまった結果、自己認識に欠け、自らの専門への認識をも欠いているのが現状だ。

先進国には先進国たる理由がある。発展途上国は、発展のためには努力し続ける目標が必要であることを知らなければならない。

○来日前、日本人というのは、何事につけ極めてきちんとしていただけ認識していた。そして来日後、プログラムをこなしていく中で、日本の人も物も確かに秩序正しく、その上細かな点にまで気配りがなされているのがしみじみと感じられた。

私の専攻はミュージカルである。そのため京都造形芸術大学での訪問交流の際、彼らのリハーサルの様子から日本の大学生の自分の専攻に対する強烈な愛着と誇りが伝わってきて強く心を打たれた。本番にひけをとらないあの情熱を自分も見習わなくては、と思った。

それから、今回の訪問で印象に残ったのは、自分の専攻に関するプログラムとホームステイであった。新国立劇場や京都芸術劇場春秋座を見学した際には、劇場の設定と専門的な設備について我々もこれに学ぶべきだと感じさせられた。総じて人にやさしい設計でありながら、専門性をも兼ね備えているという印象だ。また、松山バレエ団訪問も忘れることができない。バレリーナの方々やスタッフの皆さんがとても優しく、演技にも大変感情がこもっていて、見ている間、私も他の団員も何度も涙がこぼれてしまった。両国において芸術の果たしてきた重要性を痛感させられた。

ホームステイもまた、同様に最も心に残る出来事だった。なぜなら私にとって外国の家庭におじゃまするのは初めてのことだったし、言葉の壁やうまくコミュニケーションとれるだろうかという心配が、来日前から私を戸惑わせていたからだ。ところが、ホストファミリー宅に着いてみると、お母さんは英語ができてほっとしたし、一晩中お家の方が日本の伝統工芸である勾玉作り体験をさせてくれ、忘れられない思い出となった。帰国後、日本がとても良い国であるということ、人々は礼儀正しく親切であること、機会があれば是非自らが行って体験してみるべきだということを周りの人々に伝えたい。そして私自身も、また機会に恵まれたなら是非もう一度日本に来てみたいと思っている。

○来日前、日本は生真面目で環境保護と民族意識が強いというイメージと共に、日本人に対し一種の恐れのような気持ちを抱いていた。

来日して日本を体験してからというもの、日本人は親切で温かく、細かな所にも気を配り、礼儀正しいという印象が変わった。とはいえ、それでもやはり理解できない部分もあった。

新国立劇場の見学では、劇場全体の設計と細部の工夫のほか、芸術へのたゆまぬ追求と基準の高さとを垣間見ることができた。落ち着いた色合い、複雑な舞台設計、音響素材へのこだわり、そして劇場設営スタッフの真剣で懸命な仕事振りが強く心に残った。

また、松山バレエ団は、私にこれまで経験したことのない感動を与えてくれた。それは踊りそのものというより、バレリーナ一人ひとりの優しさ、そして踊りと表現に対する思いの強さが、私の胸をわしづかみにしたのだった。

○今回、中国大学生訪日団に参加できたことをとても光栄に思っている。初めて日本を訪れた私は、確かに日本に対しどこか隔たりを感じていた。だが、訪日中の2つの出来事が私の日本への見方を一変させたのである。中日関係における政治や歴史的問題を離れ、普通の日本人の生活の中に我が身を置いた時、そこにあるのは礼儀を重んじ、あらゆる面で国民のレベルの高い、日本という国だった。1つ目の出来事は、松山バレエ団

を訪れた日のことである。ここは自分の専攻とも関係ある場所だったので、元々期待度は高かった。しかし思いもよらなかったのは、私たちがバスを降りるや、全てのバレリーナやスタッフの方々が団本部から離れた街角まで出てきて私たちの到着を待ち受け、温かな笑顔で出迎えてくれたことだ。中でも清水総代表と森下先生の芸術への崇敬と飽くなき追求には私も目頭が熱くなり、「芸術に国境はない」という真理をまざまざと教えられた気がした。2つ目は、この感想文を書く僅か2時間ほど前の出来事だった。私は2人の日本人に助けられたのである。言葉がわからず電車の切符を買えずにいたところ、まず1人の日本人が進んで買うのを手伝ってくれた上、目的地の方角を教えてくれた。そして次に2人の年配の女性の助けで無事ホームにたどり着くことができたのだった。日本人のこの親切心、見知らぬ人への思いやりに私は胸を打たれた。

思うに、如何に国が強大となり発展を遂げようとも、結局人が求めるのは暮らしの幸せなのだ。帰国後、私は友人たちに日本の印象をあるがままに伝えたいと思う。日本人の人の高い意識に学びつつ、中日両国がどうしたら平和と共栄の関係を深めていけるのかを考えていきたい。

○日本での訪問交流で最も印象的だったのは、日本人の外国人に対する優しさと我慢強さ、そして質へのこだわりと真剣さであった。中でも松山バレエ団には最も心を揺さぶられた。私たちが訪れた日はとても寒かった。それなのに、バレリーナの皆さん全員が薄い舞台衣装のまま入り口前の路地に立ち、私たちを出迎え、一人ひとりと握手をして下さったのだ。とても感動した。そして交流が終わると、また皆さんで私たちを見送りに出てきて、抱き合ってお別れを言い、私たちがバスに乗り込み出発してからもずっと手を振り続けてくれたのだった。

新国立劇場の訪問では、職員の方が舞台や座席、天井の造り等について説明してくれた。この劇場は、音の反響の距離に至るまで科学的な計算がなされており、それには寸分の狂いもないという。こうした極限までこだわり、とことん究極を目指す姿勢に本当に感服させられた。

帰国したら、私はみんなに日本人の時間に対する厳しさと礼儀正しさについて伝えたいと思っている。この2つは中国人にやや欠けている点だからだ。決められた時間内にやるべきことを終え、グズグズしたりダラダラしたりしてその後の勉強や仕事に差し支えるようではいけない。古い詩に『明日』の後にはまた次の『明日』がやってくる。『明日』のなんと多いことか。日々その日のうちに物事を成し遂げず『明日』を待っていたら、結局時を無駄にし、永遠に挫折してしまう」と書かれているではないか。また礼儀についても同様である。中国は古来より「礼儀の国」と呼ばれてきたのに、私たちはそれをきちんと受け継がず、盛り上げたり広めたりしてはこなかった。中国は実に多くの面でそうだ。中華五千年の輝かしい宝を、私たちは継承するだけでなく、更に創造し、時代と共に歩んでいかなければならないと思っている。

○日本人にとっての環境保護は、国レベルから個人に至るまで、一人ひとりが責任をまっとうし、それを自分の任務として位置付けているように思える。来日してすぐ目にした細かく分別されたごみ箱。そしてホームステイ時、ホストファミリーと夜おしゃべり

した際に教えてもらった環境保全の大切さ。これらは全て環境意識が日本人一人ひとりに深く浸透していることの表れにほかならない。ホストファミリーはまた、私たちに持参したシャンプーや洗顔クリームを使わないよう、用意した環境保全型の洗面用具を使うよう勧めてくれたのだが、このことから環境を守ろうとする姿勢が窺えた。何でも京都市は年間数百億円を環境保全のために費やすという。自治体がいかに環境を重要視しているかを物語る数字であろう。

囲碁分団の一員としては、日本の棋士の方々のことが深く心に残っている。碁を打つ時の真剣さ、繊細さ、そして厳しさ。勝敗に関わらず、一手ごとに真剣に思考する姿勢は私たちも大変勉強になった。3度交流戦を行い、日本の老・壮・青年それぞれの世代の棋士たちと対局した。皆さん共に謙虚で求道的な態度であったし、対局後に行われる検討では、いずれのお相手も皆礼儀正しく恭しい振る舞いであった。このことは私たちも是非見習わなければと思う。

○来日前の私の日本に対するイメージは、科学技術が発達し、人々は礼儀正しく時間に厳しいというものであった。そして来日してから最も印象的だったのは、科学技術の背後にある力や責任感が、人に世界を変えるほどのエネルギーをもたらす、ということだった。この国の人たちはただ生真面目なだけでない。若い人たちの活力、ハイレベルな教育水準をもたらす国民意識の高さというものも伝わってきたし、人々には自信と誇りが感じられた。

今回、私たち囲碁分団は神奈川大学と日本棋院、そして京都など各地の棋手と対局し、交流したのだが、これら3つの地域にはそれぞれ特徴があった。神奈川大学での参加者は主に地元の囲碁愛好家の皆さんで、年配の方々ではあるものの、囲碁に対する思いの強さは称賛に値するものだった。日本棋院での対局は、紛れもなく最も大切な一局であった。相手は新人王などのタイトルを有する若き名手で、心に残る対局となった。また、指導的な立場にある二人の棋士が、この日終日熱心にあれこれお世話下さる姿も見る事ができた。京都は大きな街ではないが、参加者には中国やヨーロッパからの留学生の姿もあった。多様な文化の融合はしばしば創造の源となるものだ。

○この度の訪日では、様々なことが強く心に残っている。神奈川大学の美しい環境、日本棋院での真剣で興味深い交流、奈良県飛鳥地区での心温まるホームステイ等である。だがもし最も心に残ったことを挙げるとするならば、やはり京エコロジーセンターの見学だろう。私自身も他の人と同様、省エネや環境保護に努めなければならないことは知っていても、一体それがどれほど大切なのか、またどうすればいいのかについて決してよくわかっていたわけではない。今回センター職員の方が、本当に熱心にゴミの分別や電気自動車、風力発電、省エネと排出削減に関する知識を私たちに解説してくれた。日本が積み上げてきた努力を自分たちも見習わなければと思った。展示ホールに掲げられていたセンター長の手による漫画がとても面白かった。描かれていたのは、頭の中は環境を守ることといっぱいなのに、実際にやることといえば全く環境にやさしくないことばかり、というもの。これもまた私が帰国したら周りの人たちに伝えたいと思うことだ。環境保護とは、決して単なる空想に留めるものではなく、実践に努めてこそである。自

分の身近なところから日本の進んだ経験に学びたいと思う。そして美しいふるさと地球を築いていきたい。